

# Citrina 通信

キトリナつうしん  
No. 850



## 「水郡線 90 周年記念」祝典 参加レポート Report on the Suigun Line 90th Anniversary Celebration

**福** 島県棚倉町で、2024 年 11 月 9 日(土)、主催:一般社団法人ニワトコ(代表理事:矢崎潤子)、後援:白河市、棚倉町、埴町、矢祭町、鮫川村、協力:早稲田大学生物同好会 OB ゆかいな仲間たちのもと、「童話ト、駅弁ト、列車ト」と題する水郡線全線開通 90 周年記念式典が、令和6年度福島県地域創生総合支援事業のもと開催された。

今回の祝賀イベントは虫の里福島奥久慈の会の理事でもあり、棚倉町に生まれ、現在も住まわれている矢崎潤子さんにより企画立案され、矢崎さんの太い人的ネットワークで、ゲストに元・日テレアナウンサーの杉上佐智枝氏、JR 九州の元社長・現相談役の唐池恒二氏ほか多彩な方々を招いて、盛りだくさんの催しだった。



### 前夜祭.....

■JR 水郡線とはその名前の通り「水戸と郡山を結ぶ路線」で、茨城県と福島県を南北に結ぶ全線非電化かつ単線で残っているローカル路線だ。久慈川沿いののどかな田園地帯は日本の原風景を彷彿し、ディーゼルエンジンの重低音を腹に感じながら、車窓から見る架線電柱のない風景は何とも言えず心地よい。

■記念列車運行の前日には、棚倉町総合スポーツ施設の「ルネサンス棚倉」のクラブハウスで、後援した各市町村長を始め地元財界のトップ約 80 名の列席のもと、盛

大に前夜祭が催された。

棚倉町の奥州一宮の八槻都々古別神社に奉納される国の重要無形民俗文化財の御神楽奉奏が会場で披露された。

■その後、虫の里福島奥久慈設立の会代表の中江信氏から、矢祭町に 2025 年 3 月の昆虫館オープンに向けての説明の機会があり、スライドを使って、宣伝広報を



●写真 1: 矢祭町佐川町長の祝辞 ●写真 2, 3: 重要無形民俗文化財の御神楽奉奏 ●写真 4: 虫の里福島奥久慈設立の会代表の中江信氏による、実物の標本を回覧しての昆虫館計画の紹介 ●写真 5: 大盛りの松茸ご飯に地元の秋の幸満載のご馳走。

行った。一般の人にも虫の面白さを理解してもらうために、アフガニスタンで灌漑事業や医療活動に尽力され凶弾に倒れた中村哲医師が好きだったパルナッシウスと、

作家・北杜夫の小説に登場した台湾のフトオアゲハの標本を示しながらの説明をした。会場に来られた方々もうなずいておられ、手応えがあったように感じた。



●写真 6: 磐城棚倉駅で出発前の臨時列車 ●写真 7: 豪華海鮮寿司弁当 ●写真 8: 参加者全員と関係者で、出発前に記念撮影。オレンジのトレーナー姿はこの祝賀会を企画した矢崎潤子氏 ●写真 9: 新幹線のお弁当を前に絵顔の子供たち ●写真 10: 杉上お姉さんの「オオムラサキの一生」の紙芝居に聴き入る子供たち

記念祝賀臨時列車

■翌 11 月 9 日は秋晴れの元、いよいよメインイベントの水郡線全線開通 90 周年祝賀列車の運行となった(写真 6)。上り臨時列車2両編成は、お弁当や催し物の機材を積み込んで、常磐棚倉駅を定刻の 12:10 に発車した。列車内は全席指定の満席で、お弁当や飲み物を置ける臨時のテーブルが組み立てられて(写真 9)、さながら観光列車のようで、気分も盛り上がる。

■お昼時でもあり早速、各自にお弁当が配られて、大人は新潟の海鮮寿司弁当(写真 7)、子供たちには新幹線の弁当箱にハンバーグやオムライス(写真 9)。いっぺんに祝賀ムードが高まる。

■車窓からの紅葉を楽しむ間もなく、車中では元・日テレアナウンサーの杉上佐智枝氏による、子供相手の紙芝居が始まった。2 編のうち1編はオオムラサキの幼虫から羽化までの物語で、子供たちは床にお行儀よく座って杉上お姉さんの巧みな語りに魅入っていた(写真 10)。紙芝居はとても良く出来ていて、擬人化されているとはいえ生態的にも正しく、これは今後昆虫館での子供たち相手の催事に十分に使えると思った。

■九州から社員3人を連れて参加の JR 九州相談役の唐池恒二氏は、JR 九州で華々しく「ななつぼし」の企画を打ち上げて全国的有名列車にしたたてた立役者で、かつて若かりし国鉄時代は、この棚倉駅前の営業所勤務だった所縁の地だそう。その唐池氏自ら、子供たち相手に列車型ストラップを景品にじゃんけん大会をしたり、

大人たちには上梓されたばかりの唐池氏著の「ななつ星への道」(PHP 研究所)を配られていた。

■大いに盛り上がったところで、杉上佐智枝氏によるヘルマンヘッセの「少年の日の思い出」を、大人向けにしみいる様な朗読があった。その後、今回の臨時列車の定年をひかえた車掌さんは自らフルートで「鉄道唱歌」を吹いて子供たちと一緒に車中を練り歩き、童話のようなこの光景はテラ爺にとって妙に感動的だった。昆虫館は子供たちを主役にする重要性を再認識した瞬間でもあった。

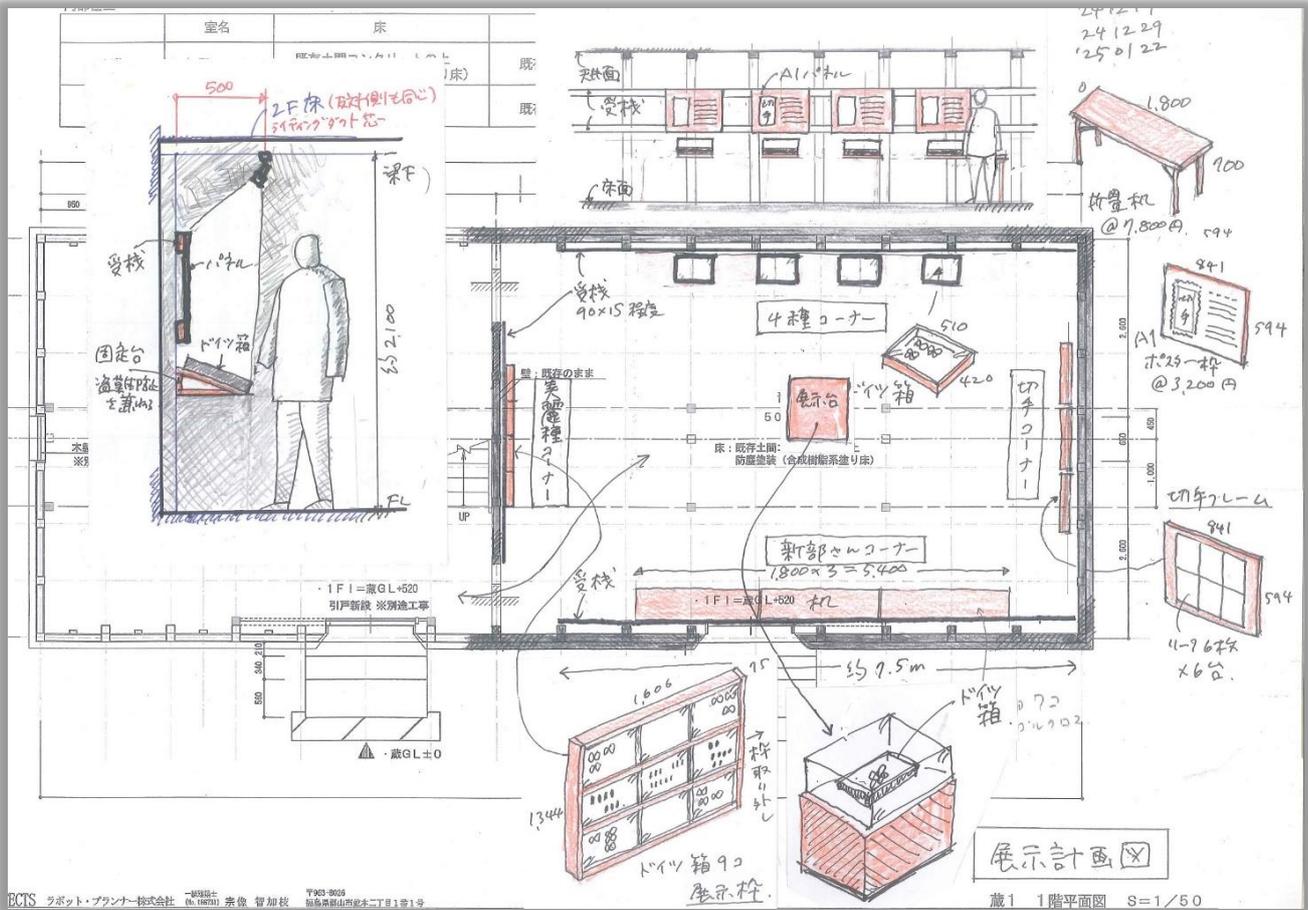


■参加費用は棚倉町～水戸の往復乗車券、お弁当とお土産がついて一人 3,000 円(子供 1,500 円)、ニトコからの援助があるとは言え、お値打ちだ。母子連れとお年寄りが多かったが皆さん笑顔で、テラ爺もあつという間の 2 時間半の列車旅だった。我々は「鮎めし弁当」やたくさんのお土産を頂いて水戸から上野に向かったが、皆さんは棚倉までの復路もゆっくりと楽しんだと思う。

(寺章夫／2025年1月19日)



## 昆虫館の展示計画がいよいよスタート



**虫**の里福島奥久慈のプロジェクトは、中江信代表の呼びかけで、この企画をご理解していただいた多数の方々から支援金が集まり始め、おかげ様で第1期工事の目途がたった。まずは敷地内の土蔵(写真左上)を使っの3月末の昆虫館プレオープンに向けての改修工事が年明けより始まった。当初は土蔵の床や壁に内装材を張り回して新たに異空間を作ること考えていたが、せっかくの古くからの歴史を感ずる内装は出来る限り残し、当時の雰囲気の中に虫の展示を加えてその対比の美しさを意図することにした。工事費節約の策だったが、この選択は結果的に正しかった。

■昨年7月の虫のイベントの際に、開館記念のフレーム切手を発行して記念小型印を押すアイデアが関係者の間で持ち上がった。協議の結果、地味ではあるがこの昆虫館に因んだ種と言うことで、イピタスタイマイ、モンキアゲハ、ウスバシロチョウ、フタスジチョウの4種に決まり、JPS 昆虫切手研究会の澤口尚子氏にデザインを依頼した。また記念押印用の封筒や、寄付等でお世話になった方々へ切手を入れた返礼品(プレゼンテーションパック)などの準備をしている。3月23日(日)の一般公開に

先立ち、3月21日(金)には矢祭郵便局でウスバシロチョウをあしらった小型記念印(澤口尚子氏のデザイン)が使用されることになり、お祭りモードを盛り上げる演出のひとつになると考えている。(写真右上)

■今回のプロジェクトを象徴する親しみやすいロゴマークのデザインをプロのデザイナーに依頼し、カラーとモノクロのマークを制定した。今後、Tシャツや印刷物に積極的に刷り込んで、「虫の里」の認知度を高めてゆきたいと考えている。(写真中央)

■開館記念の企画展示のテーマは「チョウと切手」として4種のフレーム切手にまつわる展示コーナーには、90年近く昔に絶滅して今では極めて入手困難なイピタスタイマイの実物標本を世界で初めて一般公開することで、当昆虫館の目玉とした(写真左下)。また世界の昆虫切手コーナーには JPS 昆虫切手研究会の森晋一郎氏ほかの皆さんの美しい昆虫切手の展示を計画し、そして新部公亮氏による「天空の蝶 パルナシウス」と題する文学的資料とそこに登場する実物のチョウの標本の展示を考えており(写真右下)、盛りだくさんの「チョウの世界」を存分に楽しんでいただく企画とした。



昆虫館として利用する旧佐川邸古民家の土蔵



昆虫館開館記念の切手4種と小型印を押した封筒



切手4種の解説パネルの一枚



ロゴマーク



新部公亮氏の展示標本箱の一つ

■また展示室の入口の見返りの壁面にはドイツ箱9箱に、美麗種のチョウや甲虫類を並べ、華やかなコーナーに仕立てた。

■将来母屋が本格的に展示スペースになった時は、土蔵は全面的に標本収蔵庫として使う予定である。昨年9月より、温湿度を自動記録するデータロガーを、屋外、土蔵内の1階と2階、標本収蔵ダンスとその中のドイツ箱中に置いて、記録を取り始めている。空調や除湿設備のない時代に、貴重な衣類や漆器類を問題なく保管していた先人の知恵は意外と良好な温湿度環境が保たれているのではないかと、期待している。いかに維持費を抑えて標本を管理してゆくかは、このプロジェクトの成否にかかっている。

■また寄贈された標本箱収蔵のための標本収納ダンスを地元の家具屋に試作依頼したところ問題ない出来栄で、本番の製作が始まっている。この土蔵だけでドイツ箱6,000個弱の収蔵能力があると計算している。

■昨年12月16日に工事関係者が集まり、着工に向けての打合せを行った際に、この旧佐川邸に高校時代まで住まれていた、今回のプロジェクトの事務局長でもある石射正曜氏は、この計画地全体の樹木の伐採や剪定を現場指揮しておられた。幹線道路に面する畑地を大型バスや乗用車の駐車場にする予定で、そこから見上げるようにして土蔵の白壁や母屋の瓦屋根、作業小

屋が見える(写真下)。昆虫館に行くまでのアプローチ沿いの複数の梅の木を残して、「梅の木の小径」とするアイデアや、駐車場と母屋の間の一画にチョウたちが好む植物を植え、バタフライガーデンにすると言う。石射氏が幼少の頃に遊んだ経験からの虫の里の青写真がはっきりと見えてきて、いっぺんに夢が膨らんできた。



(寺章夫/2025年1月15日)

タイトル画像:JR水郡線90周年記念の特別列車